

真宗教育シリーズ2

ほんとうに
生きるということ

中川皓三郎



真宗文庫

目次

浄土から始まる人生

1

人間の不安、おそれ

8

満たされない欲求

10

お釈迦さまが目覚めた真理

15

— もともとはじめからそうなのだ —

共に助け合って生きる

18

人間は居場所を失うと生きることができない

23

地獄 — 独りぼっちの世界 —

26

人間の根源的欲求

31

人間で在ることの課題

35

現実の私たちの姿

39

欲望する自我

44

後世を析る

47

煩惱がさまたげにならない道

51

受け止められるということ

54

根も絡むような深い交わり

59

真宗教育とは — ほんとうに生きるということ —

62

真宗大谷派学校連合会加盟学園・加盟校

69

エリアマップ、一覧表

・引用文のうち、旧かな遣いのものについては読みやすさを考慮し、現代かな遣いに改めた。

浄土から始まる人生

私は以前、『親鸞しんらん 生涯と教え』（真宗大谷派学校連合会編集、東本願寺出版部発行）という、学校の授業で使うテキストの編纂に監修として関わらせていただきました。この編纂をとおして、あらためて教えられたことは、「浄土真宗」という言葉で明らかにされた親鸞しんらん 聖人の教えは、特定の宗教団体の中でしか通じない特定の思想ではなく、人間が誰しも共通にもっている課題に答えられた教えであるということです。そのような意味で、親鸞聖人の教えがどのような教えであるのかを、私自身の学びをたずねながらお話しさせていただきました。その教えに基づく「真宗教育」について考えたいと思います。

はじめに、「浄土真宗」という言葉が、日本の国に生きる私たちの

中で、数多くある仏教教団の中の一つの宗派の名前であると理解されているとすることがあります。「広辞苑」という辞典にも「浄土門の一派。浄土三部経を所依とする。阿弥陀仏の他力本願を信ずることによって往生成仏できるとし、称名念仏は仏恩報謝の行であるとする。親鸞を開祖とし、浄土宗より出て一派をなした」とありますように、常識的には、仏教の一つの宗派の名前であると理解されています。しかし、親鸞聖人は、そのような意味で「浄土真宗」という言葉を使われたことは一度もありません。まずはじめに、このことをよく確認しておく必要があるのではないかと思います。

では、「浄土真宗」とは、どのような教えなのか。そのことについて、大谷専修学院の院長でありました、故・信國淳先生は、次のように述べておられます。

しかし、「浄土真宗」という言葉は今日でこそ、そんなふうにか符牒ふりょうかレッテルかのようになってしまうているが、これは元来、一宗教団体の名称なんぞというものではなく、我々人間の現実に生きる真実の立場を、「浄土」というところに見出した者の歡喜ぎの表現であり、「我は浄土真宗に帰す」と感激をもって自らの立つ立場を宣言した言葉なのである。そして、この言葉の深い意味を初めて感得かんとくされたのが、他ならぬ親鸞聖人であったところから、聖人の依られた立場に同じく帰依し、賛同を表する者達が、浄土真宗の徒、いわゆる「門徒」たることをもって自らを称するに到ったのだと考えねばならない。浄土真宗という言葉には、そのような一つの深い叫びというものがこもっている。その深い叫びに触れ、言葉のもつ原初的、本来的な意味を

体験し、感激するところに、浄土真宗というものが、我々の現実生活の上に本当に生きてはたらくということが生まれてくるのである。

浄土真宗の信仰においては、「浄土」というものは、あつてもなくともよいというような曖昧あいまいなものではない。浄土がなくては浄土真宗は成り立たぬ。しかし浄土が、ちょうど中国や印度いんどという国が西の方にあるように、「どこか地球の向こうの方に在るのだ」と考えるなら、そういう考えはもとより浄土真宗でも何でもない。また、「浄土の生活が死後において初めて始まるのだ」という考えも、やはり浄土真宗ではないと言わねばならない。浄土は我々の人生行路じゆうろの終帰ではなく、かえってその発端はつたんであり、「浄土を得て後に初めて我々の人生が、本当に人生らしく光と意味と

をもち始める」というのが浄土真宗の立場である。

（『いのちは誰のものか』「浄土（一）・樹心社」）

ここで信國先生が、「浄土」というものは、あつてもなくともよいというような曖昧なものではない。浄土がなくては浄土真宗は成り立たぬ」と語られ、あるいは「浄土を得て後に初めて我々の人生が、本当に人生らしく光と意味とをもち始める」というのが浄土真宗の立場である」と語っておられるように、実は、私たちの人生は、浄土で終わるのではなく浄土から始まるのです。だから、日々の生活の中で、浄土という世界を見出すことによって、はじめて「生まれてきてよかったなあ」と、それこそ「苦勞の多い人生であつたけれども、尊い、得難い人生を生きることができた」と、喜びと満足の中で自分の人生を完結していくことができるのです。このような人生を、親鸞聖

人は「浄土真宗」という言葉で教えてくださいました。そういうことで、「浄土真宗」という言葉を「浄土こそ真宗である」というふうに、間に言葉を補って学んでいきたいと思っています。

ちなみに、この「真宗」という言葉の「宗」は、中国の天台大師智顛が「宗トハ要ナリ」といっていますように、「カナメ」ということなのです。だから、「これがあるから生きていける」「これがなくなったら生きていけない」というような、いのちの中心、支え、依り処を「宗」という言葉であらわしているのです。そのことを、大谷大学の初代学長であった清沢満之先生は、次のようにおっしゃっています。

吾人の世に在るや、必ず一の完全なる立脚地なかるべからず。若し之なくして、世に処し、事を為さんとするは、恰も浮雲の上に立ちて技芸を演ぜんとするものの如く、其転覆を免る

る能わざること言を待たざるなり。

〔清沢満之全集〕第六卷「精神主義」・岩波書店

私たちが、この世に人間として生まれ、人間として生きる限り、どんなことがあってもこわれない、それこそ「完全なる立脚地」とありますように、完全な支え、依り処というものをもたずには生きることができないのです。だから、そのことを意識する意識しないにかかわらず、どんな人も何かを支えにし、何かを依り処にして、現に今、生きています。だから人間は、真宗というものをもたずに生きることはできないということが、一番のベースにあるのです。

(註1) 宗祖親鸞聖人の教えをひろめ儀式を執り行う真宗大谷派の教師資格を取得するための学校。全寮制の生活の中で一年間学ぶ。京都にあり、真宗大谷派が直接運営している。